

紀要『人文・自然研究』第十六号

キルケゴールにおける想像力論の展開



須藤孝也

二〇二二年三月二十五日 一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究 第十六号

Hitoisubashi Review of Arts and Sciences 16



二〇二三年三月二十五日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

一八六―八六〇―一 東京都国立市中二―一

組版：精興社

## キルケゴールにおける想像力論の展開

須藤孝也

はじめに

理性による媒介や統一を批判するキルケゴールが決断主義の思想家として理解されたことは、ある意味で自然なことであつたかもしれない。「あれかこれか」「選択」「情熱」「意志」「飛躍」「逆説」「主観性」など、そのような目で見れば、そうしたイメージにフィットするたくさんの言葉を彼のテキストは提供してくれる。前世紀には、そうした枠組みの中でキルケゴールを理解する者は「キルケゴール研究者」の中にも少なからずいた。C・S・エヴァンスによれば、キルケゴールの「信仰者は、英雄的な意志の行為によつて、不合理と自身を知るものを自身に信じさせようとする」ものであつた<sup>(1)</sup>。

こうした決断主義者としてのキルケゴール理解は、想像力の働きに注目する諸研究によつて徐々に修正されることになつた。堅実な研究が蓄積される中で、後の研究の基礎となる研究書が八十年代末から九十年代初頭にかけて二冊出版された。一冊はD・J・グーウエンスによる『キルケゴールの想像力の弁証法』であり、もう一冊がM・J・フェレイラによる『変容するビジョン…キルケゴールの信仰における想像力と意志』である<sup>(2)</sup>。グーウエンスは、キルケゴールがいかにしてロマン主義を受容し、またどこにその限界を見出したのかを細かく分析した上で、想像力が美的段階、倫理的段階、宗教的段階においてそれぞれ異なる働きをすると指摘した。想像力は美的段階においては可能性を、倫理的段階においては理念を、宗教的段階においては神やキリストを志向するというグーウエンスの理解は、想像力の一つの「本質」を探求しようとする諸研究に抗し、キルケゴール思

想の動的な展開に忠実であろうとした試みとして画期的であつた。また、キルケゴールの想像力が所与のものをギフトとして、かつ課題として見なす点を指摘したことも大きな功績であつた。この理解はフェレイラにも受け継がれた。フェレイラは、想像力が能動的であるだけでなく受動的にも働くこと、実存変容の過程において想像力が飛躍や情熱として主要な役割を果たすこと、想像力は意志を透明化することなどを指摘した。

その後今世紀に入ると、A・グロンが、想像力と可能性の関係について考察を深めながら、想像力が「視点の逆転」を可能にする働きであること、それによつて人は倫理的に他者に関わり、宗教的に神に関わることが可能になると論じた<sup>(3)</sup>。

最近ではR・S・ケンプが、美的実存について再評価しようとする近年の傾向を受けて、誘惑概念について考察し、想像力が誘惑に応じる能力であるとの解釈を示した<sup>(4)</sup>。直近ではH・B・リンデンサルが、人は想像力によつては神を正しく捉えることができないうキルケゴールの議論のうちに、一四世紀のドイツの神秘主義者、J・タウラーの影響を見出した<sup>(5)</sup>。

本論文は、以上のようなこれまでの研究を踏まえながら、グーウエンスがなしたように実存段階論の枠組みの中で想像力の働きを区分して考察するのではなく、キルケゴールの想像力理解そのものが展開していく様を跡づける。第一段階は一八四一年の『イロニーの概念』や四三年の『あれかこれか』といった初期において、第二段階は四六年の『哲学的断片を結ぶ非学問的後書き』(以下、『後書き』と略す)において、第三段階は四九年の『死に至る病』や翌年の『キリスト教への修練』において展開された。なお第四段階の想像力論は、キルケゴールが生涯をかけて思索し続けたものであり、後期から晩年にかけて豊かに深められたものの、断片的着想は中期からすでに散見される。なお、ここで「段階」と呼んでいるが、各段階は断絶の関係にない。各段階は前の段階を廃棄しながら新たに構成されるのではなく、前の段階を受け継ぎ、発展させるようにして展開していく。そのため、後の段階の想像力論においても前の理解が時折言及される。とはいえ、キルケゴールが想像力について考察し論じる際、そこには四つの主題があり、それらが集中的に採

用された各々の時期があることや、内容的な深まりが認められることからして、それらを発展的に並べることができる。これらの展開を考慮に入れなければ、キルケゴールの様々な言葉は全体像を結ばず、私たちはそれらを有意味に解釈することができない。それぞれの段階が想像力をどのようなものとして論じていたのか、以下各節において順に見ていく。

## 一 無限化と有限化

カントやロマン主義、ドイツ観念論の議論を受けて、キルケゴールもまた *Phantasi* と *Indbildning* / *Indbildningskraft* の語を用いている<sup>(6)</sup>。意味についても、直接五感を用いてする知覚と区別しながら、前者を創造的で生産的なイメージを作る力を指して、後者を実在物を再生産するイメージを作ることを指して使うことがある。しかしながら、キルケゴールの問題関心は認識論の枠を大きく超え出るものであったため、常にこの区分にのっとして両者を使い分けているわけではない。以下に見るように、キルケゴールがこれらの語を自在に使うて考えようとしたのはもつと別のことであつた。そうした理由により、英語圏でも特に必要のある場合を除いて、両者の訳語としては *imagination* の一語が用いられており、本論文も同様に両者を「想像力」と訳す。

想像力の最も基本的な働きは、目の前にあるもののイメージを心のうちに再現することである。さらに想像力は観念を作ること、対象をそれが据え置かれた状況から切り離すことができる。その時、あるいはその場所で、という限定から対象を解放する。

人間は想像力によって、所与のものを対象として前に置き、それと関わり始める。ここには想像力の対象に対する依存と対象からの自立が、すなわち想像力の受動性と能動性の両方が認められる。この能動性によって想像力は単にイメージを再生産するばかりでなく創造的に観念を生産する能力としても働く<sup>(7)</sup>。さらに想像力は、能動的に観念を理想へと転じていく。想像力の能動的な働きは、芸術や思想の可能性を確保するものであるが、同時に私たちが世界を不正確に認識してしまう根拠ともなっている。同時に想像力は受動

的に、理想を理想として認識するようにしても働く。

キルケゴールは、一方で人間が理念や理想に関わることを可能にする想像力をこの上なく高く評価するのであるが、他方でその無限化する働きについては極めて厳しい目を向けていた。人間が、自らの現実性や有限性を忘れ、ただ自己を無限化するばかりの存在となってしまうことに対する批判は、ロマン主義研究に没頭した初期にすでにあつた。その成果は四一年の学位論文、『イロニーの概念』に読むことができる。この時期にすでに彼は、所与の現実性を否定する運動であるイロニーを統制する必要性について考えていた<sup>(8)</sup>。想像力の働きを十全に確保した上で、無限化する想像力やイロニーをどのようにして統制すればいいのかという問題への関心が、『あれかこれか』や『反復』、『人生行路の諸段階』といった初期から中期にかけての諸著作を貫いている。

『あれかこれか』には、無限化と有限化の運動を行う倫理的人間が描かれる。「彼の有限な人格は選択によって無限化される、選択によって彼は自己自身を無限に選ぶのである」(3: 213)。このように、有限な人格はまず無限化の運動を行う。そしてそこに立ち現れた理想的な自己を選ぶ。自己は、すでにあるものでありながら、「なる」ものでもある。すでにあるのとは異なるものになるうとするが、しかし自己の変化である以上、なることになるものは自己自身以外のものではありえない。「個人が知っている自己は、現実的自己でありかつ理想的自己である。個人は理想的自己を自身の外に像としてもっている。それと等しくなるよう、個人は自らを形成する。他面でそれを自身の内にもっている。それは自己なのだから」(3: 216)。このようにして、倫理的人間は、自身のうちに理想的自己を見出し、それを現実的自己において実現する。「自己自身を倫理的に選ぶ者は、自己をこの特定の個人として具体的に選ぶのであり、彼は具体性を獲得する」(3: 239)。自己に関わることも形成することもしない美的人間や無限性のうちに自己を揮発化させてしまうイロニカーとは異なり、倫理的人間は理想を現実的自己のうちで実現しようと試みる。

この無限化ないし理想化と、有限化ないし具体化の二重運動は、後に『死に至る病』でも繰り返される。そこではあるべき自己について次のように言われる。

「自己は無限性と有限性との意識された、それ自身に関わる総合である。自己の課題は、自己自身になるということである。(中略)自己自身になるということは具体的になるということである。ただし具体的になるということは、有限的になることでもなければ無限的になることでもない。なぜなら、具体的になるべきものは総合にはかならないからである。したがってその発展は、自己の無限化において自己自身から無限に離れていき、有限化において自己自身へ無限に帰ってくることにあるのでなければならぬ。」(11, 146)

このようにキルケゴールは、人間には無限化の運動のみならず、具体化ないし有限化の運動も不可欠であるとす。後者を忘れた時に人が陥るのが「無限性の絶望」である。

なお、キルケゴールは無限性の絶望に、ロマン主義のみならず観念論をも含めている。

「想像的に、あらゆる体系的な思惟は、永遠の相の下に (sub specie aeterni) ある」(7, 158)。確かに、ロマン主義と観念論は同じものではない。観念論は、ロマン主義が観念の可能性を憧憬し、追究する悪しき無限を理解している。だが方法は異なれ、抽象化の運動に終始する観念論もロマン主義と同様に実存への立ち帰りを忘れており、無限性の絶望に含められるというのがここでキルケゴールの議論である。右の引用に「想像的に」とあるのは phantasia を訳したものである。キルケゴールがこのように Phantasia の形容詞形の phantasia を用いるのは、特に「現実からかけ離れた」事態を指す時である。

こうした議論は、ロマン主義や観念論を「他者」として否定しながら自身を肯定するようにして述べられているのではない。実際には、無限性の絶望は彼自身にとっての問題でもあった。『人生行路の諸段階』には次のようにある。「私の病は何か。憂鬱である。この病はどこに座っているのか。想像力の内に。可能性がその養分である」(6, 363)⑨。現実を忘れて可能性を肥大化させ続ける想像力やイロニーを統制することは、自身にとっても喫緊の課題であった。

## 二 諸要素の同時性

『イロニーの概念』の五年後の四六年、キルケゴールは中期の哲学的名著、『後書き』を出版した。本書でキルケゴールは、美的実存、イロニー、倫理実存、フォームル、宗教性A、宗教性Bと細かく区分しながら、実存の発展について体系的に論じることになった。

本節で詳しく見るのは、「実存する主観性における主観性の個々の諸要素の同時性、すなわち思弁のプロセスに対する対立としての同時性」と題された、本書の第二編第三章第三項における議論である。ここで想像力について、より詳しく言えば、想像力と他の諸要素、すなわち思惟と感情との同時性について論じられる⑩。

キルケゴールはここで、思惟を最高の段階とする歴史的發展論が実存する個人には妥当しないことを次のように指摘する。「学問的には、思惟が最高のものであるというのは全く正しいように思われるだろう。世界的には、以前の諸段階が棄てられているというのは同様に全く正しいように思われるだろう。しかし現代には、想像力も感情もまたない諸個人から成る一つ世代が生まれるのだろうか？ 体系の中の第一四節から始めるように人は生まれるのだろうか？ 私たちは決して、人間精神の世界的発展と諸個人とを混同しないようにしよう」(7, 315)。このようにしてキルケゴールが主張するのは、実際においては、各人が思惟の手前を、すなわち感情や想像力の段階を生きなければならぬということである。キルケゴールによれば、精神を發展させることはあくまで「自己活動」(7, 316)である。キルケゴールは、歴史哲学を否定するのではないが、実存する各々の人間は思惟の段階の以前から精神生活を始めなければならないと言うのである。

さらにキルケゴールは、たとえ各人が精神を發展させ、思惟を獲得するに至ったとしても、感情や想像力が止揚され、不要になることはないと言う。「思惟には想像力を嘲笑させておけ、そうしたら想像力はその仕返しに思惟を嘲笑する。感情についても同様である。課題は、あるもののために他のものを棄てることではない、課題は同等性 (Ligelighed) 。



同時性 (Samtidig) である」(7, 318)。ここで諸要素の同時性と同等性が言われる。キルケゴールは、感情と想像力と思惟のいずれをも棄てることなく同時に、しかもそれらのうちのどれかを特権化することなく同等のものとして、働かせるのでなければならぬとする<sup>(11)</sup>。

なお、キルケゴールは本書で思惟を「普遍的なもの」を捉える働きとして理解している。「信仰の対象は、実存の意味での神の現実性である。だが、実存するということは、何よりもまず、単独のものであるということの意味する。それゆえに思惟は実存を看過せざるをえないのである。というのは単独のものは思惟されず、ただ普遍的なものだけが思惟されるからである。そして信仰の対象は、実存における、すなわち、単独のものとしての神の現実性、言い換えれば、神が一人の単独の人間として存在したということである」(7, 328)。キルケゴールは、「単独のもの」によって人間としての「単独者」のみならず、キリストをも含意するため、普遍性の次元で思考する思惟は、神がキリストにおいてこの世に來たつたということを理解することができないと考えている。

諸要素の関係について重要なのは、これら三要素は、相互に無関係に、単独で働くものではないということである。それらは「弁証法的に」、すなわち相互に関係し合いながら働く。これは実存の発展を遂げたキリスト者においても当然妥当する。では、思惟と感情と想像力が同等のものとして同時に働くということは、あるいは相互に影響を与え合いながら弁証法的に働くというのとは、実際どのような事態か。「キリスト教は、個人が同時に彼の思惟を賭すること、リスクを負って悟性に抗して信じることを要求する(弁証法的なもの)」(7, 390)。悟性や思惟と信仰の間には緊張関係が存する。キルケゴールはそれを「思惟が賭けられる」事態として表現している。キルケゴールは、信仰することを思惟することによって代替することを許さないのみならず、信仰することを思惟することよりも上位に置くがゆえに、思惟は「賭けられる」と解されるのである。

とはいえ思惟はやはり人間の本質規定であるから、人間は、信仰するようになった後も思惟を棄てるわけではない。それは、感情や想像力との緊張関係のうちで働き続ける。諸

関係の同時性が意味するのはそうした事態である。「もしも弁証法的なものが跳び越されてしまふとしたら、キリスト教全体が軽薄な想像になり、それは迷信、否最も危険な迷信そのものになってしまふ」(7, 381)。思惟は、信仰にとって代わりうるものではないが、その領分において果たすべき役割を十分にもっている。

### 三 他のすべてのための能力

第二段階では、想像力は感情や思惟と同等の位置に置かれたが、次の第三段階では、想像力の働きそれ自体がより深く解明され、その他の能力とは異なる特別な位置に据えられることになる。

「想像力は主として無限化する媒体である。想像力は他の諸能力と同様のある能力ではなく、言うなれば、他のすべてのための (instar omnium) 能力なのである。一人の人間がどのような感情を、認識を、意志を持っているかということは、つまりは彼がどのような想像をもっているかということに、すなわち、感情や認識や意志がどのように反省されているかということに、つまり想像力にかかっている。」(11, 147) このように『死に至る病』では、想像力は感情、意志、認識と並ぶものではなく、それらすべてを支え、それらに機能する資格を与えるものとされる。

ここでキルケゴールは、反省を可能にするものが想像力なのだと言う。「自己とは反省である。そして想像力は反省であり、自己の再現であり、これは自己の可能性である。想像力はあらゆる反省の可能性であり、そしてこの媒体の強さが自己の強さの可能性なのである」(11, 145)。人が反省することができるのは、想像力があるからである。ここで「自己の再現」と言われているように、反省は、意識の自己自身への折り返し、すなわち自己反省を本質とする。人間が自己を自己と認め、自己に関わり、自己を形成しうるのは、人間が自己反省する能力たる想像力を備えるからである。キルケゴール思想において常に自己が中心的な位置にあるのはこうした想像力理解による。

キルケゴールが用いるキーワードの一つに「自分のものにする (tilægne)」があるが、どうしてキルケゴールが真理を自分のものにすることを強調するのかも、以上の議論から理解することができる。キルケゴールにしてみれば、思惟も想像力ないし反省によって支えられている以上、思惟される事柄はすべて自己反省と同じ意味連関のうちにあるからである。逆に想像力が弱い強度でしか働かず、自己反省が十分ではない時は、感情や認識や意志は、現実を離れ、「想像的な (phantastisk) 感情、認識および意志」(II, 147) になってしまう。

また想像力が可能性と連結されている点も極めて重要である。「想像力は可能性を発見する。可能性が入ってくると、直接性と決裂することになる」(II, 170) と言うように、想像力が直接性を廃棄するのは、可能性を見出すがゆえである。自己は反省されることによつて変容しうるものになる。その他の事物も、そのようではないかもしれない可能性を含めて捉えられる。私たちが対象の変化を捉えることができるのは、可能性とともにその対象を捉えているからにはかならない。もし私たちがこのように想像力によつて可能性に開かれていなかったならば、私たちは一切の変化はもちろん、変化しうるすべてのものを捉えることができないであろう。そのようにして想像力は認識を支えているのである。さらに、可能性に開かれることによつて、私たちが期待したり、失望したり、喜んだり、悲しんだり、感情をもつことも可能になる。

『死に至る病』における想像力理解の特徴は、その理解が反省性の起源にまで徹底されたことにある。これによつて、想像力論はさらに弁証法的に展開されることになった。第一段階では想像力の働きは、もっぱら可能性を見いだすところに認められたが、本書においては、さらに可能性から現実性へと回帰する運動のうちにも想像力の働きが認められる。なぜかと言えば、キルケゴールはここで、可能性を見いだすことだけでなく、第一節ですで見たとあるように、自己自身への回帰もまた「無限に」なされるということを通察するからである。すなわち、有限性を離れて無限性へと向かう運動ばかりではなく、無限性から有限性へと回帰する運動にも想像力の働きを見るのである。すでに述べたように、

無限化は想像力の働きである。こうして想像力は、理想を見出すよう働くだけでなく、理想を実現する運動のうちでも働く。理想性と現実性を繋ぐこと、理想の実現可能なあり方を見出すこと、理想を現実へと、抽象的なものを具体性へと翻訳すること、キルケゴールによれば、これらもまた想像力の働きなのである。

さらに同時期に執筆され、翌年に出版された『キリスト教への修練』では、想像力と意志の関係へと議論が敷衍される。そこでキルケゴールは、意志が働くのも想像力が確保する可能性の中においてであると言う。想像力が意志に先行することについて次のように言われる。「人間は誰も、程度の差はあつても、想像力と呼ばれる能力を備えている。この能力は、一個の人間となるために必要な第一の条件である。というのも、意志が第二の、究極的な意味で決定的なものだからである」(II, 186)。意志は、想像力という第一の条件が確保された限りでのみ働く。四四年の『哲学的断片』では信仰は「意志の表れ」(Forsøg) だと言われたが、この第三段階が明確にするのは、想像力の条件が確保された限りにおいて、つまり想像力がビジョンを見出した限りでのみ、意志が働くということである<sup>(12)</sup>。

もちろん意志が不要になるわけではない。想像力に理念を実現する力はない。想像力が見出した理想を現実へともたすことができるのは意志である。「認識だけを強調したり、意志だけを強調するならば、人は人間を理解し損ねるだろう」(II, 163) と言われるように、意志にはその領分において果たすべき役割がある。そしてまた認識にも果たすべき役割がある。いずれにしても、第三段階のキルケゴールは、それらの働きを支えるのは、反省することを可能にする想像力だと言うのである。

#### 四 受け取り直される直接性と想像力

第四段階は、想像力論の最終局面にあたる。ここでの想像力についての記述は、これまでのように想像力について分析的に論じるというよりはむしろ、想像力を用いることで人



間が至りつく新たな実存の地平を記述する形をとる。この最終局面で、想像力はいったん挫折を経験する。神に由来しない自身の力としての想像力がその限界に直面した後、人間は、神から想像力を受け取り直すことによって、再度新たに神に関わり始める。こうして新たに働き始める想像力は「反省の後の直接性」(20, 363)としての信仰とともに働く。

では、この反省を経た後の直接性、しばしば「第二の直接性」と呼ばれる信仰とともに働く想像力とはどのようなものか、キルケゴールが構想していたところを跡づけてみたい。

キルケゴールは「二つの倫理宗教的小論」や『キリスト教への修練』において、想像力を介して神に関わりとうとする青年について書いている<sup>(12)</sup>。青年は子どもの時に、十字架につけられた人間が描かれている絵を見せられる。それは苦しみの絵であり、かつ愛の絵であった。彼はその絵に「想像力によって引き寄せられ」(12, 186)、以後継続的にその絵のことを思い浮かべ続けた。

すでに見たように、想像力は理想化するよう働く。彼は想像力によって、愛と苦しみの「完全性を見事に再現」(12, 186)して表象する。とはいえ、この完全性は想像の媒体のうちの完全性ではない。そこには、実際にキリストが愛し、苦しんだという「現実性が欠けている」(12, 188)。その意味で、想像された完全性は不完全なものである。ここで言われているのは、現実の媒体とは異なる想像の媒体ゆえの限界である。言うまでもなく、キリストを信仰したところで、これらの媒体の差異は決して無きものとはならない。

第二に、想像力の限界は、信仰者の意志の限界としても現れる。キリスト教は、キリストに付き従う者はキリストを倣うべしという要求をもっている。それは、必要とあれば自分が所有するものを他者に与え、「最も不幸な人と、文字通り一つの立場に身を置くこと」(12, 71)を信仰者に要求する。当然信仰者はこの要求を果たそうと意志する。とはいえ、この要求は容易に達成しうるものではない<sup>(14)</sup>。あるいはキリスト者の意志はこれを達成するほどに強くはない。この挫折についてキルケゴールは次のように述べている。「要求をもつ律法は、全員の転落となる。なぜなら全員がその要求通りではなく、これによって罪を知るようになる」(9, 103)。キルケゴールは、他の多くのキリスト教思想家と同様

に、罪を人間の意志のうちに見いだすが、キルケゴールの議論の特徴は、キリストの倣いという要求を人間がよく果たしえないことを念頭において語られているところにある。

とはいえ、要求を果たし損ねることによって、人間は単に罪人とされて終わるわけではない。むしろこの挫折を経験し、心から悔いてこそ、これを赦す神との関わりが可能になるといえる。キルケゴールの主旨である。要求を果たし損ねた人間は、自らの無能を知り、そして神からの助けがなければ自分が真に善いことをなしえないことを知る。キルケゴールによれば、自身の無力を知って人はやと神と適切に関わることができるようになる。

第三に、ここで自覚される人間の無力さは、神を理解する人間の能力としての想像力の限界をも意味する。キルケゴールは、人間が神を理解し損ねる事態について、「課題はキリスト教を理解する (begribe) ことではなく、人間がそれを理解できないということを理解することである」(21, 68)と述べている<sup>(15)</sup>。これに関し、グロンは正しくも、人間がその想像力によって神に関わり、またその想像力が挫折するという、想像力の両義性を指摘している。「想像力の概念は宗教それ自体の両義性を捕まえる。宗教は、人間の営みでありながら、ラディカルに自己を問題化することをも含意しうる。宗教は想像力によって想像しえないものに関わるのである」<sup>(16)</sup>。言うなれば、十分に神に近づくことによって、始めて人は神との遠さを知るのである。

いわば「自力」としての想像力が挫折したところで、躓かぬ者は「悔悟においてすべてを神から受け取る」(5, 63) ようになる<sup>(17)</sup>。「第二の直接性」のみならず、想像力もまた、人間を精神として措定した神から受け取り直されることによって、再度働き始める<sup>(18)</sup>。

こうしてキルケゴールのキリスト教倫理は、神を人間の想像力の産物として解する人間主義から、そしてまた、万人を愛の対象としながらも、人間が自身に由来する力のみによって他者を愛することができると考ええる人間主義から、明確に決別することになる。キルケゴールによれば、人間が倫理的に他者に関わるのは、自ら備える理性によるのではなく、各人が関わる神から力を得ることである。人間は他者を模倣するようにして倫理を行うのではない。リンデンサールが言うように、卑賤のキリストの倣いはいわゆる「猿真似」

とは異なる<sup>(19)</sup>。倣いは、各人によって各々の状況の中で自分に可能なように遂行される。さらにキリスト者は、その都度の果たし損ねを神の前に認め、赦され、キリストに慰められ、励まされながら、日ごとに自己を形成し、各々が倣いの達成度を上げていく。「全てのは生成のうちに置かれている、なぜなら経験的対象は完結しておらず、かつ実存しつつ認識している精神自体が生成のうちにあるからである」(V, 174)と言われる通りである。そのようにして「想像力は人間を完成する」(20, 12)とキルケゴールは考えた。

このように第四段階の想像力論は、第三段階の想像力論、すなわち感情、思惟、意志、あるいは信仰といったすべての精神活動を可能にする根本能力としての想像力理解を基礎にしつつも、その十全な展開において、自己を措定した神への信仰、およびその受肉としてのキリストの倣いという宗教的地平のうちでなされる運動をも記述するものであった。これは、人間的思弁による無限の把握が挫折したことを直視した後で、なお有限性と無限性の双方がそこから由来するところの神を前提とし、各人がその想像力のうちで神へと関わることによって、自己や他者に対する責任ある関わりを実現しようとするものと解釈することができる。周知のように、キルケゴールは、キリスト教の神を、人間性という内在へと還元しえないだけでなく、神学的にもその真理性を論証しえない「超越」の神として理解したのであったが、このためにキルケゴールはもっぱら神への関わりを可能にする想像力論の枠のなかで人間論を展開することになったと言いうことができる。キルケゴールは、キリスト教を信仰しつつ、人間とは何ぞやと探求し、そうすることでキリスト教信仰の現実にも変更を加えた。第二節で見たように、この変更は、思惟や認識といった哲学的営みとともになされた。その想像力論は内在性の領域を超えて展開されるものであったが、思惟は信仰と異質なものでありながらそれと弁証法的に関係しあうものとして想像力の働きのうちに含まれているからである。すなわち、想像力は、そのうちで諸力が有機的に関係しあうところの反省であり、この反省の運動が各人においてもたらず内面性の変容が、最終的には神の助力を得て、実際の他者関係においても認識可能な行動の変容を引き起こすと考えられているのである。

おわりに

以上、キルケゴールの想像力論が四つの段階を経て展開するプロセスについて明らかにした。第一段階では、想像力は可能性や理想を見出す力として重要なものとされる一方で、その無限化を統制し、いかにして有限化ないし具体化の運動へと繋げていくのが問題となった。続く第二段階では、想像力は感情や思惟と同等の位置に置かれた。また、それらは同時に働くこと、相互に影響を与え合いながら働くことが言われた。第三段階では、反省を可能にする想像力の働きが解明された。想像力は、感情、意志、認識に対して可能性を開くことにより、それらが働くようにする。さらにこの構図の中で、想像力は意志が働くための条件として理解された。第四段階の考察は、自力に恃む想像力が超越の神を前に一旦挫折した後、想像力が「反省の後の直接性」とともに神から再度受け取り直されることを論じる。キリスト者は神から受け取り直した想像力をもって、キリストに倣う自己を形成していく。

本論文では、キルケゴール思想に内在して、その想像力論の展開を追ったが、他方で、どうしてキルケゴールはその想像力に関する理解を展開していくことになったのかという点については、詳しく説明することができなかった。その他、想像における(非)現前性の問題や、キリスト教信仰から出発したために考察が十分に深められることがなかったところはなかったかといった問題についても十分に論じることができなかった。今後の課題としたい。

註

キルケゴールからの引用は新版全集(Søren Kierkegaards Skrifter, Bd. 1-28, København, G. E. C. Gads Forlag, 1997-2013)を用い、巻数と頁数を示した。





- (1) C. Stephen Evans, "Does Kierkegaard Think Beliefs Can Be Directly Willed?", in: *International Journal for Philosophy of Religion* 26, 1989, p. 182. 同様にH・ヴェネルハムはキルケゴールの思想に「主観主義」を見出した。Terence Penelhum, *God and Skepticism: A Study in Skepticism and Fideism*, Dordrecht: D. Reidel, 1983.
- (2) David J. Gouwens, *Kierkegaard's Dialectic of the Imagination*, New York: Peter Lang, 1989. M. Jamie Ferreira, *Transforming Vision: Imagination and Will in Kierkegaardian Faith*, Oxford: Clarendon Press, 1991°.
- (3) Arne Grøn, "Imagination and Subjectivity", in: *Ars Disputandi* 2, 2002, pp. 27-36.
- (4) Ryan S. Kemp, "The Role of Imagination in Kierkegaard's Account of Ethical Transformation", in: *Archiv für Geschichte der Philosophie* 100 (2), 2018, pp. 202-31.
- (5) Hjørdis Becker-Lindenthal, "Kierkegaard on Imagination: Possibility, Hope, and the Imitation of Christ", in: *History of European Ideas* 46, 2020, pp. 1-16.
- (6) 辞書には「Indbinding」は「感覚に対して現前していない外的世界にある諸対象あるいは諸関係の像を形成する能力、あるいはそれらを生き生きと表象する能力」とあり、Phantasiは「創造的な想像力」とある (*Ordbog over det danske Sprog*, København: Gyldendal, 1927)°.
- (7) Cf. 「人がそれを見ることも聞かなくてもなかつたとしても、それにもかかわらず想像力は意図することなく、夕暮れのくつろいだ憧れの像を作り上げる」(6, 32)°.
- (8) 「イロニーの概念」の最終章は、この「統制されたイロニー」(1, 352) について論じている。
- (9) 日記に次のような記述がある。「幼い頃から、私は巨大な憂鬱の支配下に置かれていた」(16, 58)°.
- (10) 四二年の日記には「悟性、感情、意志は人間の本质規定である」(19, 414)とある。このことから、キルケゴールは本書で人間の本质規定を、感情、意志、悟性から、感情、想像力、思维へと修正していることがわかる。感情はそのまま踏襲されているが、悟性は論理必然性を共有していることから思维に含められ、意志は想像力に含められている。
- (11) グーウェンスは、悟性が止み、想像力がすべてを支配すると言いが、諸要素の同時性が言われている以上、これは正しくない。Gouwens, op. cit., p. 63.
- (12) この意味でケンプが、実存変容のプロセスは、パースペクティブの変容と、可能性から現実性へのシフトの二つから成ると指摘するのは正しい。Kemp, op. cit., p. 209.
- (13) SKS 11, 61.
- (14) リンデンサールは做いが完遂されないのは、意志の弱さのためではなく、殉教と引き換えに神に浄福を要求するという行為が「神を試みる」ことになるとしたためとしている (Lindenthal, op. cit., p. 7)°。しかし次の記述からして、これは正しい理解ではない。「臆病や不安によって一切を断念することは神を試みることにならないだろうかと恐れて、それを敢えてやろうとしないのは、奴隷の精神です。神を試みることになるのではないかと恐れたからといって、狡猾にも従来通りに振る舞っているのは、神をからかうことです」(10, 189)°.
- (15) グーウェンスは「*komme comprehend* (全体を完全に理解する) と *apprehand* (部分的に感知する) を区別して、前者は不可能だが後者は可能であるとす (Gouwens, op. cit., p. 233)°.
- (16) Grøn, op. cit., p. 36.
- (17) なおキルケゴールは躰きの可能性は無にすることができないと考えている。「彼〔神〕は躰きの可能性を取り除くことができない。おお、〔その〕唯一の愛の業なのだ」(11, 237)°.
- (18) 「受け取り直し」は *Gjentagelse* を原義に忠実に訳したものである。この語はしばしば「反復」と訳されるが、文脈によっては、*gen* (再び) と *tagelse* (受け取ること) から「受け取り直し」と訳す方が適切である。キルケゴールはこれについて、「あらゆる瞬間に命を賭け、あらゆる瞬間にそれを失い、そしてそれを再び得る」(4, 88)と述べている。人間が失ったものを再び神から受け取るのは、自己を含むあらゆるものが神から派生したものであることによる。これに関し、H・シユルツは、すべての運動が神に始まることから、信仰は、人間が自らの意志によって獲得するものではないことによる (Heiko Schulz, "Second Immediacy", in: *Studien zur Philosophie und Theologie Søren Kierkegaards*, Berlin: De Gruyter, 2012, p. 349)°.
- (19) Lindenthal, op. cit., p. 13.

### On the Development of Kierkegaard's Theory of Imagination

Takaya SUTO

In the literature, some scholars have turned to Kierkegaard with the hope to shed light on the essence of imagination by trying to articulate what Kierkegaard would have recognized as the essence of imagination. Others have attempted to classify the functions of imagination into three groups based on the three stages of human existence. In contrast, this paper argues that although the various theories may seem contradictory at first glance, we can reconstruct a coherent theory of imagination once we recognize the changes to Kierkegaard's discussion of imagination which can be distinguished into four stages of development.

In the first stage, imagination was understood as that which is indispensable for seeking the ideal. However, Kierkegaard had to deal with the issue of how to control imagination's function as the maker of infinity and connect it to the movement towards the finite or the concrete.

In the second stage, imagination was given an equivalent position to feeling and thought. And they were understood to work at the same time and have influence on each other. Faith and thought work dialectically.

In the third stage, imagination was understood as that which makes reflection possible and supports as well as enables feeling, willing and knowing to function properly. Imagination launches reflection and opens up the possibility for them. In this context, imagination was understood as a condition for the will to function.

In the fourth stage, Kierkegaard discussed that the "self-made" imagination was to collapse for a time in front of transcendent God. After that, imagination was to be received with "the immediacy after reflection" from God again. With this new imagination individuals continue to form themselves with God.



人文·自然研究 第十六号